

<b>Title</b>	外国資料からみた中世・近世初期日本語における主題主語の有助詞化
<b>Author(s)</b>	小林, 茂之
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,17(1) : 1-10
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=142">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=142</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 外国資料からみた中世・近世初期日本語 における主題主語の有助詞化

小林 茂 之

The Development of the Topic Particle in Middle  
and Early Modern Japanese  
from the Perspective of Foreign Language Translation Materials

Shigeyuki KOBAYASHI

In this paper I intend to make clear the distinction between topic and nominative subjects in Middle Japanese on the basis of focus construction of a sentence, and I will examine the principles governing the use of the topic particle after subjects in the early stage of Modern Japanese.

Subjects in Japanese are classified into topic and nominative. In Modern Japanese, topic subjects are accompanied by the particle *ha*, and nominative ones are accompanied by the particle *ga*. Therefore, there is no difficulty in distinguishing topic subjects from nominative ones in the representation of particles.

In contrast to Modern Japanese, Middle and Old Japanese have subjects without particles in addition to those with particles, so it is not clear whether subjects without particles in pre-Modern Japanese are topical or nominative from the point of view of morphology. It is also not clear how the practise of using particles after subjects has developed.

We observe “an odd use of *ga*” in Middle Japanese and in the early stage of Modern Japanese in materials translated into foreign languages for learning Japanese. I argue that this reflects a stage of transition from topic subjects without particles to ones with the particle *ha*.

## 1 はじめに

日本語の主語名詞句は、中世の間に有助詞化が進行し、近世までにはほぼ助詞を伴うようになった。言語の変化は、ある日突然に切り替るわけではないので、急に無助詞主語から有助詞主語に変わったとは考えられない。

---

Key words; Middle Japanese, Modern Japanese, *ha*, *ga*, topic, nominative, foreign language translation materials

言語変化の過程の最中では、体系から逸脱した現象が起きることもあり得る。しかし、言語学がある変化をその終結時においてとらえる時、変化前と変化後の体系が瞬間的に切り替わったかのように記述するために、そのような変化の過程は運用の問題として体系的変化から覆い隠されてしまう。

しかし、現実の言語変化は漸次的であって、漸次的な様相を記述することはより言語の記述を実態に近づけることなのである。そして、言語の実態は体系からは逸脱的にみえるものかもしれない。

外国資料にみられる中世・近世語のガには、現代語のハに相当するものがある。しかし、先行研究において、そのようなガが中世語から近代語のハ・ガの用法までの変化の過程にある変異として、分析されていないように思われる。

そこで、本稿では、そのような中世のガを中世のハ・ガの体系からの変化の中において分析を試みる。

## 2 中世日本語の無助詞主語

中世日本語では、主語名詞句に無助詞 主格助詞ガという変化が起きた。また、中世語を含めて古典では、人名の後で助詞が表出されない傾向があることから、このような場合の無助詞は無助詞主題であると考えられる。したがって、この節では、中世日本語には主格相当の無助詞名詞句と主題相当の無助詞名詞句とがあることを示す。

### 2.1 中世日本語における無助詞主格

主格助詞は、中世において現在のように原則的には表出されるようになった。(1)は、鎌倉期の『平家物語』と室町期の『天草版平家物語』である<sup>(1)</sup>。

- (1) a. 上古にはか様にありしかども事いでこず、末代いかゞあらむずらむ。おぼつかなし」とぞ人申ける。(『平家物語』)
- b. 上古にはかやうのことがござったれども、事がいできなんだが、末代にはなんとあろうぞと言うて(『天草版平家物語』)

(1a)では、主語が無助詞であるが、対応する(1b)では、主格助詞「が」が表出されている。このような変化の結果、近世期までに主格助詞は表出されるのが普通になった<sup>(2)</sup>。

### 2.2 中世日本語における無助詞主題

中世語の資料として、『応永本論語抄』<sup>(3)</sup>の無助詞の用例を検討する。なお、用例末の数字は、中田(1976)におけるページ数、行数である。

はじめに、有助詞主題の用例を同書の冒頭部からあげる。

(2) 然時は曾参有若をなせに有子曾子と云や。曾子は孔子の道を続に依て賞翫~~メ~~名をかゝすして曾子といゝ、有若は孔子に形か似たり。(6-6~8)

(2)の「は」の表出は、二人の人物、有子・曾子が対比されていることに関係すると思われる。つまり、この「は」は対比用法であると解釈できる。

次に、人物名に「は」が現れない例を見ることにする。

(3) a. 孔子\_\_尚書の文を引て答へ玉ふ。(113-9)  
b. 孔子\_\_此事を評し玉へり。(129-1)

(3)の主語名詞句について、名詞句の階層の観点から検討してみよう。角田(1991: pp.51-52)によれば、階層の高い方の名詞句では「は」となるのが無標であり、階層の低い方の名詞句では「が」となるのが無標である。人間が主語の名詞句は、階層の高い方の名詞句であるので「は」となりやすい。したがって、(3)は、無助詞主題の例と考えられるのである。

### 2.3 中世日本語における主語名詞句

現代日本語の「は」の用法については、「が」との使い分けの問題として論じられることが多かった。「は」と「が」との違いを主題と主格とする統語論的な扱いの他に、「は」は旧情報を表し、「が」は新情報を表すという説は語用論的な観点からのものである。

「は」と「が」の違いに関して、どちらの観点からの研究にしても、形態的な区別に対して、統語論・語用論的な分析を行っている。つまり、どちらかの助詞が原則的には名詞句に付くことが前提となる。

ところが、近世以前の日本語においては、助詞非表出の名詞句がある<sup>(4)</sup>。つまり、近世初頭以前の  
中世日本語では、主語相当の名詞句の形態は表1のようであった。

したがって、中世日本語では、主題形式に、名詞句+は、名詞句+ の二つの場合があり、主格形式にも、名詞句+が/の、名詞句+ の二つの場合がある。

助詞	主題	主格
が/の	×	
は		×
無助詞 )		

表1 中世日本語の助詞と主題・主格

### 3 中世初期日本語の主格と主題

#### 3.1 現代日本語と朝鮮語との対照

朝鮮語は、日本語とよく似た主格助詞と主題助詞をもった言語である。Shimojo and Choi (2000) は、現代朝鮮語と日本語に主語相当の名詞句に表出される主格助詞と主題助詞の分布を主題助詞の機能の観点から論じている。

主題の確立を“activation”という談話構造における情報論的概念で説明している。新しい情報が談話に導入されると、それは初期の状態では“nonactivated”(不活性化)されている。それが、談話中でその知識が増大し、談話の進行に伴い“nonactivated”から“activated”(活性化)に移行すると、主題化が可能になる。現代語と朝鮮語の主格助詞と主題助詞とが一致しない例をあげている。以下に日本語の例文だけをあげる。

(4) a. メリーは何をしましたか？

メリーは /\* が 歌を歌った。[ subject activated: predicate focus ]

b. 誰が歌を歌いましたか？

メリー \* は / が 歌を歌った。[ subject nonactivated: argument focus ]

c. 何が起きましたか？

メリー \* は / が 歌を歌った。[ subject nonactivated: sentence focus ]

(4a) の場合、日本語では主題助詞だけが適格であるのに対して、朝鮮語では主題助詞・主格助詞どちらも適格である。(4b, c) では、日本語・朝鮮語ともに、主格助詞だけが適格である。そして、朝鮮語における“activated”を、談話において中心となるものだけに限定して、それを主題の確立と呼んでいる。つまり、朝鮮語における主題化は、話題化と呼ぶことが適当である。

“activated”, “nonactivated” は、談話における情報的な遷移を表す概念であるので、それを中世日本語の主題助詞「は」や主格助詞「が」の表出・非表出に対して、朝鮮語の場合とは別の観点で適用することは許容されてよい。

そこで、「は」による対比を他者との関係が情報的に確立された状態と解釈し、それを“activated”とみることとする。他方、対比の非確立を他者との関係に関する情報が十分でない状態であると解釈し、“nonactivated”とみることしたい。中世日本語の例<sup>(2)</sup>では、「は」は名詞句が対比されている場合に表出されている。これは、“activated”である。

焦点構造	主題化	主語型式	
		日本語	朝鮮語
主語焦点	非確立	が	K A / I (主格)
文焦点		が	K A / I (主格)
述部焦点		は	K A / I (主格)
	確立	は	(N)UN (主題)

表2 現代日本語・朝鮮語の主題・主格

焦点構造	対比化	主語型式	
		現代日本語	中世初期日本語
主語焦点	確立	が	が
文焦点	非確立	が	
		は	
述部焦点	確立	は	は

表3 中世初期日本語と現代日本語の主題・主格

以上のような観点から日本語と朝鮮語の主格と主題とは表2のような対応関係をもつ<sup>(5)</sup>。表2で示したように、朝鮮語では、述部焦点・主題化非確立の領域では主格助詞が表出されるのである。

### 3.2 中世初期日本語と現代語の対照

中世日本語の主題助詞・主格助詞の表出・非表出を3.1でみた文の情報構造と対比化<sup>(6)</sup>との二次元的な枠組みを仮説として立てることにする。これを表3に示す。なお、主格助詞「の」については、表3の範囲に加えない。

表3で示したように、中世初期の日本語では、主語相当の助詞非表出の名詞句は、文焦点の場合と、述部焦点で対比化の非確立の場合とがあり、現代日本語との対照から前者は主格に、後者は主題に相当するものと考えられる。また、無助詞主格と無助詞主題の間の助詞非表出という共通性は、対比化の非確立として捉えることができる。

## 4 無助詞主題の有助詞化

表3では、中世日本語において焦点構造において対比化が非確立の場合、主語が無助詞となることを示した。

焦点構造が文焦点の場合に、現代語ではガが現れ、それが述部焦点の場合に、現代語ではハが現れる。他方、中世初期語では、述部焦点であっても、対比化されている場合、ハが表示されるが、対比化されていない場合には、無助詞主題となる。

この新しいハの領域は、キリシタン資料や朝鮮資料ではハではなく、ガが表出された用例がある。以下では、そうした例を検討し、新しく有助詞化された領域における動揺とみられることを論じる。

#### 4.1 朝鮮資料

近世初期の日本語では、無助詞主題が有助詞化された過程はどうであったのだろうか？ 浜田（1980）は近世初期の朝鮮資料である『捷解新語』に「変なガ」があることを指摘している。変化の途上においては体系から逸脱していることもあり得る。そこで、『捷解新語』のそのようなガについて、無助詞主題の有助詞化の過程から検討したい。

ここでは、原刊『捷解新語』（1676）における浜田が指摘した「変なガ」を、『重刊改修本捷解新語』（1781）において、(A) 無助詞に改められたもの、(B) ハの改められたもの、(C) ガのままのもの、に分類することにしたい。なお、対応がないものはとりあげない。また、表記は適宜改めたところがある<sup>(7)</sup>。

はじめに、(A) のタイプから検討する。

- (5) a. そちが代官に身が申す。(1-1)
- b. そなた代官中へ往て我々の口上を申そうわ。(改修本)
- (6) a. こう仰しらるが御もつともござる。(7-11)
- b. 仰せられます道理御もつともござりまする。(改修本)

(5)と(6)は、述部焦点で対比化の非確立の文脈である。そこで、『原刊本』でガが表出されたものの、『改修本』では無助詞に改められたのであろう。

次に、(B) のタイプを検討する。

- (7) a. 昔より束を解けて選り出したことが無いに(4-20)
- b. 昔より、束を解て選り出したことはござらぬ(改修本)
- (8) a. 公木を端々と選るとある仰しらるが、前後に無いことぢやほどに(4-25ウ)
- b. 公木を端々と選るとおつしやるは、前後に無いことござるほどに(改修本)

(7)と(8)も、述部焦点で対比化の非確立の文脈である。そこで、『原刊本』でガが表出されたものの、『改修本』ではハに改められたのであろう。その改められ方が、ハの新しい領域を反映しているのである。

次に、(C) のタイプを検討する。

- (9) a. とねぎが此の間気相気で御座つたに(1-26ウ)
- b. とねぎ様が此間は御病気で御座つたが(改修本)
- (10) a. 前にはけしきのものがこのやうに御座なかつたに(2-7ウ)
- b. 以前は賄の品がか様には御座らなんだ。(改修本)

(9)と(10)は段落の冒頭であるので、主語の対比化は確立されない文脈である。これらの文脈が(B)

タイプと同じく述部焦点で対比化の非確立の文脈であるとする、(10)の「ガ」は「ハ」に改められるべきである。その意味で、これらは「変なガ」である。

これらに対して、次の(11)は、(C)タイプであっても、段落の文頭に当たらない文脈である。

- (11) a. 此の公木がなぜに此の様に悪う御座るか。(4-9ウ)  
b. 此の公木がなぜに此の様に悪ふ御座るか。(改修本)

次に、(11a)を前の文脈とともに再掲することにする。

- (12) 主 公木五十束入れまるした程に出でてみて取らしられ。  
客 此の公木がなぜに此の様に悪う御座るか。  
主 皆廻って、細かに見て、善し悪しを仰しられ。

この文脈は、現場指示であると考えられる。問題の「此の公木」は焦点の中に入らないので、述部焦点である。また、「此の公木」は初めて談話に導入されたので、対比化が確立しているわけではない。したがって、このガは元来無助詞主題の領域に表出されたものである。

なお、次の(13)も(C)タイプであるが、述語焦点ではないと考えられる。

- (13) a. 私らがこれを例にしまるせいか。(3-8ウ)  
b. 我々がこれを例にしませうか。(改修本)

(13)が主語焦点であると判断されるのであれば、このガは「変なガ」ではない。このガは一人称複数主語に対して用いられているので、述語焦点であると判断されて、「変なガ」に分類されたのではないだろうか。

以上、浜田(1980)で「変なガ」とされた用例を検討した。結局、浜田が「変なガ」とした基準は現代日本語の体系であるので、中世から近世にかけてのハ・ガが現代日本語と同じ体系であるという前提が必要である。しかし、それは表3で示したような異なる体系であったと考えられるのである。

浜田は、「変なガ」の原因を朝鮮人著者の「日本語の未熟さに帰せられる」と論じている。しかし、この「変なガ」は基本的に無助詞主題の領域における有助詞化に伴う変異である可能性を否定できない。

## 4.2 キリシタン資料

4.1でみた「変なガ」が他の資料にも確認されるのであれば、無助詞主題の有助詞化の過程を反映したものである蓋然性が高まる。キリシタン資料でも、現代語の体系とは異なるガがみられる。

山田(2002)によると、『日葡辞書』(1603-4)では、ポルトガル語のコピュラに、“estar”と“ser”との二つがあり、前者は一時的な状態、後者は恒常的な状態を表すのに用いられる。

山田の用例から、“ser”で訳された日本語にハが現れたものを示す。



- (14) a . これは売酒ぢや。  
b . ペドロは人あひがよい。

次に, “estar” でポルトガル語に訳された日本語に, ガが現れたものを示す。

- (15) a . 天気がのどやかな。  
b . 月がさやかにござる。

ただし, (15) の用例は, 現代語としてはガよりもハの方が適切な文脈であって, 浜田の「変なガ」に相当する。

(14), (15) の用例から, 主語の恒常的な状態には, ハ, 一時的な状態にはガが表示された。これは, 主語に対して動作述語ではガ, 状態述語ではハが表出される現代語と同じである。

もし, 当時のガが本当にポルトガル語に対応する意味であるなら, (15) は当時のガの用法であるということになる。ところが, 山田は, 主語の恒常的な状態にも, ガが表示された用例があることを指摘している。

- (16) a . 日が斜な。  
b . 虹が斜な。

(16a) は, “estar” で訳されているもので, 一時的な状態である。もし, 当時のガがこのような用法であれば, 「変なガ」が表出されているのは当然と思われる。ところが, (16b) は, “ser” で訳されているもので, 恒常的な状態である。しかし, ガが表出されているのである。

また, 山田はハについても, “estar” で訳されているのに, ハが表出されたものがあることを指摘している。

- (17) a . 都へ参つたことは今初でござる。  
b . 今年は例年よりも既得な。(解釈: 今年は例年よりも実りが良くて, 一段と豊かであった。)

(17a) は, 一時的な状態であるために, “estar” で訳されているので, ガが期待される場所である<sup>(8)</sup>。

以上みたように, “estar” = ガ, “ser” = ハという対応関係は成立しない。山田が指摘している通り, 一時的, 恒常的という観点から, ハ, ガの表出を説明することはできない。したがって, 先にあげた(15)をポルトガル語に基づいて, 一時的な状態であるので, ガが表出されたと考えることは疑わしい。

ここで, (16a), (17)を表3の枠組みに照らせば, (17a)は, 擬似分裂文であって主語部は非焦点であるので, 述部焦点・対比化非確立の領域の文である。また, (17b)は, 述部焦点・対比化確立の領域の文であるので, ハが表出されていることが説明できる。

このようにキリシタン資料においても, 表3の枠組みで説明できそうである。すると, (15)は述部焦点・対比化非確立の領域の文であるので, ガが表出されていると考えられる。つまり, キリ

シタン資料においても述部焦点・対比化非確立の領域ではガ・ハの表出に揺れがみられるのである。したがって、朝鮮資料の「変なガ」は無助詞主題の有助詞化の過程を反映したものである蓋然性が高いと考えられる。

『原刊本』における「変なガ」は、『(重刊)改修本』において、ハ、無助詞に改められたり、ガのまま改められないでおかれたことは、『原刊本』成立期以降の日本語の変化を反映したものと解されるが、『改修本』の時代の日本語においても、述部焦点の領域では変異の幅が大きかったと推測される。

### 4.3 無助詞主題の有助詞化過程

述部焦点・対比化非確立の領域は、表3で示したように、中世初期日本語では無助詞であった。この領域にハが定着し、現代語の体系に変化したと考えられるが、無助詞からハ表出に単純に変化したのではないようである。

朝鮮資料やキリシタン資料には、問題の領域にハではなくガや無助詞の用例がみられることから、ハ・ガ・無助詞の間で、ハが漸次優勢となり、現在の体系になったと考えられるのである。

一方、ガは、中世初期に単文に初期に主格用法が確立された後、表3における文焦点・対比化非確立の領域に進出し、さらに、述部焦点・対比化非確立の領域にも進出した。この領域でガが消滅する過程が終結するまで、現代語のハに相当するガが中世から近世にかけて存在したのであろう。

## 5 結 語

述部焦点・対比化非確立の領域は、中世初期日本語では無助詞であった。朝鮮資料やキリシタン資料には、問題の領域にハ・ガ・無助詞の例がみられる。これらの中でハが漸次優勢となり、現在の体系に至ったと推測される。

このように、新旧の言語形式の変化は、確率論的アプローチの立場<sup>(9)</sup>からは、急激な変化ではなく漸次的変化であることが想定できるものである。

### 注

- (1) 『平家物語』は『日本古典文学大系平家物語上』、『天草版平家物語』は亀井・坂田(1966)の翻刻による。
- (2) 小林(2000)では、主格助詞の表出は、<sup>(17)</sup>にあげたように、自動詞文で起きたことを論じた。
- (3) 『応永本論語抄』は応永二十七年(1420)書写で、代表的な初期抄である。
- (4) 金水(2001)によれば、助詞が名詞句にほぼ付くようになったのは近世初頭である。
- (5) 3.1でみたように、日本語と朝鮮語とを対照する場合、主題化は異なる。日本語では対比化を表し、朝鮮語では話題化を表す。
- (6) Rooth(1992)は、焦点を対比として解釈する。また、矢田部(1996)によれば、対比の場合の「が」は、省略不可能である。

- (7) 原文の複製・翻刻には、京都大学文学部国語学国文学研究室（1972）、京都大学文学部国語学国文学研究室（1973）がある。
- (8) 山田（2002）は、この点について、判断文であるので八が表出されたのだと論じている。
- (9) Zuraw（2003）を参照されたい。

#### 参考文献

- Rooth, Mats. A Theory of Focus Interpretation, *Natural Language Semantics* 1, pp.75-116. 1992.
- Shimojo, M. & Choi, H.-W. On Asymmetry in Topic Marking -The Case of Japanese Wa and Korean NUN. In Okrent, Akika Boyle, J. P. (Ed.), *CLS 36: The Main Session*, pp. 455-467. The Chicago Linguistic Society. 2000.
- Zuraw, K. Probability in Language Change. In Bod, R., Hay, J., & Jannedy, S. (Eds.), *Probabilistic Linguistics*, chap. 5, pp. 139-176. The MIT Press. 2003.
- 亀井高孝・坂田雪子 『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』。吉川弘文館。1966。
- 京都大学文学部国語学国文学研究室（編）『三本対照捷解新語本文篇』。京都大学国文学会。1972。
- 京都大学文学部国語学国文学研究室（編）『三本対照捷解新語釈文・索引・解題篇』。京都大学国文学会。1973。
- 金水敏 『助詞から見た日本語語文法の歴史』。文法研究会第3回集中講義『助詞の文法史』資料。2001。
- 小林茂之 「中世における主格助詞表出の一変化について」、『国語と国文学』, 77(12)。2000。
- 角田太作 『世界の言語と日本語』。くろしお出版。1991。
- 中田祝夫（編）『応永二十七年本論語抄』。勉誠社。1976。
- 浜田敦 『朝鮮資料による日本語研究』, pp.238-254。岩波書店。1980。
- 矢田部修一 「現代日本語における三種類の主格助詞省略現象」。郡司隆男（編）日文研叢書10『制約に基づく日本語の構造の研究(国際日本文化研究センター共同研究報告)』, p.p.223-239。国際日本文化研究センター。1996。
- 山田潔 「『長崎版日葡辞書』の述定・装定表現 Ser と Estar」、『国語国文』, 71(3)。2002。